

『百泊百中』

作者 淺羽 一

菓飲んでるから安心して良いよ。

言葉遣いに若干の違和感こそあるものの、その一言が最後の迷いを打ち消した。リゾー卜地のホテルさながらに雰囲気のある部屋で、眼前には真っ白なシーツが眩しいキング・サイズのベッドと、絹糸のごとき黒髪が艶めかしい極上の美女。そしてあろう事か、いつそシーツに溶け込んでしまいそうなその腕は、誘うようにこちらへと伸ばされている。

いや、誘うように、ではない。現に誘われているのだ。金糸の刺繍が全身に張り付くような民族衣装を纏い、流暢に日本語を操る美女の眼差しは、しつとりと潤んでこちらを見つめていた。その目は最早、これ以上の会話なんて必要ないと訴えかけている風だった。恐る恐る手を差し出すと、細い指が優しく応えてきた。想像以上に滑らかな肌とひんやりとした感触に驚いた。

やんわりと、しかし確かな力で導かれながら、ぼんやりとした頭の片隅でこれは夢で無かるうかと考えた。後数年でいよいよ五十路になる、それもお世辞にも格好良いだなんて言われない男が、本社の同僚連中に聞かせれば涎を垂らして羨ましがりそうな状況にいらなんて、日本にいる頃は想像もしていなかった。と言うよりも、新婚当初の面影なんて欠片もない妻の傍らで見る夢なんて、大抵が悪夢がいつそそもそも眠れない。

長い年月とストレスで固まった脳みそが、甘い官能によってゆるゆると溶かされていく。遙か昔の記憶を頼りにがむしやらに動くこちらを、漆黒の瞳が優しく見つめている。真正面から向き合うことが照れ臭すぎてさり気なく視線を外したら、ほんのりと桜色に染まった首筋と鎖骨の色つぼさにクラクラした。

ほんの数時間前までの憂鬱さなんて微塵も残っていないなかった。突然、上司から発展途上地域への海外出張を命じられた際には少なからず不安も抱いたが、今となってはあのハゲ頭にキスの雨を降らせてやっても良いとさえ思う。

世界の何処よりも幸福感に包まれた時間の中ではもう、これからの三ヶ月あまりが素晴らしいものになるであろう予感しか生み出すことが出来なかった。ろくに道路も整備されていない大陸の真ん中の採掘場は、まさしく夢の結晶が埋まる場所だったのだ。

こんなことであればもっと早くに単身赴任を志願しておくべきだった。上場企業の課長なんて名ばかりの、高いビルの上で地味なデスクワークとクレーム処理に追われて心身を削っていた日々を思い返して、心底からそう思った。文明から置き去りにされた僻地であり、最重要とまでは決して言えないながらもそれなりに価値のある稀少金属が採れるだけの、ましてや国の政策で輸出量を厳しく管理・制限されている現場の視察役。最初に辞令を受けた時は遠回しのリストラ宣告かとさえ考えたが、実際に比べれば天と地はあっさりと逆転してしまうだろう。

街を作るにはあまりにも不便な土地に転がるタコ部屋さながらのプレハブと違って、現場全体を見渡せる場所に用意された伝統家屋風の一軒家。そこに備蓄される食料は、インスタントやレトルトが多いものの故郷の味に準じた品揃えで、水だって言うまでもなく海外製のミネラル・ウォーターで。その上、何より素晴らしいのが、慣れない土地で色々と助けが必要だろうと、現場を管理する国の政府が通訳兼案内役としてわざわざ派遣してくれた絶世の美女―いや、秘書。しかも彼女はこちらの赴任中、ずっと住み込みで世話をしてくれるらしい。

正直、ろくに言葉も通じない現地人労働者ばかりで娯楽さえもなく、することと言えば

働くか食ったら下痢になりそうな飯を待つくらいしかかない、まるで闇金で身を滅ぼした男が最後に放り込まれそうな光景を目の当たりにした瞬間は、大げさでも何でもなく無理だと思っただが。いやはや、人生はなるほど苦あれば楽ありなのだと思感した。こんなに心地よい待遇でもてなせる程に優秀な現場なのだ、おそらくだが、今後本社へと送られる評価にもきつと相応の期待をすることが出来るだろう。勿論、そんなことあるはずないのだが、それでも万が一、変な嫉妬心からもしかして不正をしているんじゃないかなんて疑いを持たれても面倒だから、採掘現場以外の個人的な生活状況などを報告することは一切無いだろうけれど。

そうして、劣悪な作業環境を極楽から眺めているような時間は瞬く間に過ぎていった。一月あまりが経過した頃には、そろそろ現場の実態も真の意味で把握出来ていた。端的に言って、それは全くの無価値とまでは言わないものの、その作業効率と生産性を合わせて考えれば、とつくに本社との契約を打ち切られていても文句を言えなさそうなものだった。決して悪くはないのだ。だが、ビジネスにおいてそれは良いと同義ではない。ましてや、そこで採掘される金属の価値は他の国の台頭や別の金属の発見などもあり年々減少傾向にあった。

なるほど、と毎夜のごとく従順になる女を見下ろしながら、内心で納得した。要するに、国も必死なのだ。なぜなら、そうは言ってもその金属は今でも国の経済にかなりの利益をもたらしているはずであるし、だからこそ希少性を維持する為の輸出量の制限だ。

結論から言って、本社への途中報告はとりあえず一通りの数値を並べた後で、〈様々な観点から総合的に判断するにはもうしばらくの経過観察を必要とする〉とした。だって、最終評価を下してしまえばその時点で仕事が終わってしまう。そうなれば、万が一の見落としがあった場合、それに気付かぬまま報告してしまったことになる。それは、良識あるビジネスマンの仕事とは言えない。少なくとも、自分にはそんな中途半端で無責任な仕事など出来なかった。

無理に急ぐ必要なんて無いのだ。慌てず、じっくりと、大人の男として腰を入れてやればいい。

あたかも女として生まれたことに全身で喜びを表している女と、ベッド脇のテーブルに積み重ねた白い錠剤を眺めながら、何ともやり甲斐のある仕事だと思った。

それからさらに一月が過ぎ、二月が過ぎ、やがてあつという間に赴任期間の終わりが近づいてきた。それは同時に、最終評価を下す時が迫っていたと言うことでもあった。

素直な気持ちとして、迷いはなかった。と言うよりも、それが己の仕事であり、ビジネスマンであればそれを全うすることに対して後ろめたさを抱く必要なんて欠片も無いのだ。

この地を訪れて、およそ百日。報告書に淡々と事実を記しながら、朝から少し用があるとお出掛けていった女の帰りをのんびりと待っていた。

本心を言うと、すでに少なからずあの女にも飽きていたのだが、やはりいざ別れるとなると多少の情は湧いてきた。それに、またあの退屈な日常に戻るのだと思えば、せめて最後くらい愉快に終わらせておくべきだろうとも考えられた。どうせ、プライベートは当然としてビジネスでも、もう二度と会うことはないのだから。

女が帰ってきたのは夜になってからだ。

今か今かと焦っていたのもあり、インターホンが鳴り終わる頃には、バスローブだけ

を纏って右手に錠剤を握り玄関の前に立っていた。

そして勢いよく扉を開けるやいなや、硬直した、思考が。

きつちりとしたビジネス・スーツを着た女の両脇には、屈強そうな男が二人、スーツ姿が冗談にしか見えない迫力を放ちながら控えていた。

これは何事だ、と尋ねる間もなく、三人はずかずかと部屋に入ってきて、それから女が眼前に一枚の紙切れを差し出してきた。

英語でなく、細かな現地語で書かれたそれはまるで理解不能のものであったけれど、直後、改めて取り出されたものいきなり殴られたかのごとき衝撃を受けた。

その写真は白黒で、映っている画像も6Bあたりの鉛筆で乱暴に描かれたようなものだった。しかし、それなのに、今度こそ否応なく理解させられた。いや、正確に言えば思い出したのだ。もう二十年近くも前に、それと同じものを妻から見せられた時のことを。

呆然と立ち尽くすこちらに対して女は何も言わず、代わりに向かって右側にいた男が単調な日本語で話してきた。曰く、彼女は妊娠しています、あなたの子供です、と。

頭が真っ白になっていたのは数秒ほどだっただろう。ようやく我に返ると、慌てて言った。そんなことは有り得ないと、握っていた錠剤を突き出して身の潔白を訴えた。

女がしれっと、それは鼻炎の薬よ、と言ってきた。この辺りはほこりっぽくて、くしゃみが止まらなくなると通訳として迷惑が掛かるから、その為に飲んでいたので。

啞然とするしかない言い訳だった。そんな詭弁、通用するはずがなかった。だからこそ怒りを隠さずに、残っている男へ自分は騙された被害者であることを告げた。

事情はどうあれ、あなたの子供に間違いはないです、と返ってきた声は最も冷淡な響きをしていた。それはまさしく厳然たる事実のみを語っている感じだった。その瞬間、最早、言い逃れの出来る状況でないことを悟らされた。

がくがくと震えだした相手を支えようともせず、男達は改めて、仕事中心とは言え男女の間に来た出来事に関して文句を言うつもりは無いと告げてきた。報告書についても、何も気にすることなくありのままの事実を記してくれば良いと。

それは、確かに脅迫ではなかった。それは、単なる決定事項の説明だった。そして最後に、何かを応えるどころか床から立ち上がる気力すら失ったこちらへと差し出されたのは、ご丁寧にも日本語でまとめられた書類で、そこには延々と、先進国から発展途上国への買春ツアーや、貧しい国での人身売買、児童の性犯罪被害などを根絶する為に各国で締結されている国際条約の内容が記されていた。

帰国後、予想に反してと言うべきか、予想通りと言うべきか、本社へと提出した最終報告書に関して説明を求められることはなかった。それどころか、しばらくするとあの海外出張の業績を評価してと言う理由で昇進までした。出世後の初仕事は、部下の中から次に現地へ出張する人間を選別することだった。ちなみに、せっかく上がった給料の一部は今後の為に海外の口座へ貯蓄することを勧められ、結果的に月々の小遣いはずいぶん減ってしまった。

あれ以来、がむしやらに働く日々が続いている。

父親として、首になるわけにはいかず、会社を倒産させるわけにもいかず、どれだけ世界情勢が変わって、はたまた科学技術が進歩しようと、家族を養う為に働かなければならないのだ。そしてそれはおそらく、他のビジネスマン達も同様なのだろう。

そう言えば先日、これまでの社長が退任し、新しくその息子が社長に就任した。外国語が堪能で、国家間の事情にも精通していて、海外留学経験も豊富であるらしい新社長は、なんと弱冠三十二歳だという話だ。

なるほど、多少の不安はあるものの、総合的に見れば納得の人事であると思う。

あの国との事業が始まって、もうじき三十年あまり。

最初にそれを見つけてきたのは、前社長の業績だった。

〈了〉